

神戸銀行
支店長の
視点

山崎真人氏



早くも年の瀬です。

今年1年間の兵庫県の金融経済を振り返ると、残念ながら昨年続き新型コロナウイルス感染症に振り回された感があります。感染症の流行の波と緊急事態宣言が繰り返される中、個人消費、とりわけ外食や宿泊など対面型のサービス消費は足踏み状態が続ぎ、サービス業を管む企業の業況も厳しいものとなりました。

一方、一足先にワクチン接種が進んだ欧米諸国では急速に景気回復が進みました。当地主力の製造業では好調な外需を背景に多くの企業が生産の水準を切り上げ、神戸港の輸出もコロナ前のピークに迫る勢いで伸びました。夏場以降は、東南アジアでの感染症の影響

ウィズコロナ下での景気回復を

から半導体などの部品の不足(供給制約)に見舞われていますが、企業努力もあり全体としての生産の増加基調は維持されています。

また足もとでは感染症の影響が和らいでいます。人の流れが戻り、サービス消費も動き始めました。先行した生産や輸出を個人消費が追いかける形で景気は全体として持ち直しています。来年を展望すると、このような前向きな動きが続いていくことが期待されますが、オミクロン株のように新たな変異株の波が訪れる可能性は残ります。繰り返される流行の波の中で、ウイルスは変異しています。

一方で、わが国でもワクチン普及や医療体制の強化が進んでいます。変異株に対して、科学的な見地から、その特性やリスクを見極め、感染抑制と経済活動の両立を図るバランス感覚が問われていくと思います。

皆さま、今年もお疲れさまでした。年末年始、どうか元気で、お氣をつけて。